

カント「天才」概念発展史に関する一考察

——「精神 Geist」概念に注目して

倉橋 知佳子 (京都大学)

カントは『判断力批判』(1790)において、独創的かつ範例的 exemplarisch な芸術作品を制作する芸術家である「天才」概念を導入する。『判断力批判』の中で「天才」が論じられる箇所、いわゆる「天才論」(第43節から第50節)は、カント以後の芸術制作論の起点として多くの思想家に影響を及ぼしたとともに、それ単体で取り上げられることも多いほど知名度が高い。しかしながら、カントがケーニヒスベルク大学で私講師として行った「人間学」の講義において、『判断力批判』を完成させる前から20年にわたって「天才」概念が論じられていたことはあまり知られていない。当時カントの「人間学」講義を聴講していた学生たちの講義録(「人間学講義録」)には、「天才」概念に関するカントの思考の発展が克明に現れており、これを分析することで『判断力批判』「天才論」の形成過程をたどることができる。

『判断力批判』第49節において、「天才」のうちで中心的な役割を果たすのは、天才の心を「生き生きさせる beleben」原理である「精神 Geist」であると述べられる。この「精神」概念が「人間学」講義の開講当初から論じられていたことは「人間学講義録」から読み取れるが、その位置づけは『判断力批判』におけるそれとは異なっていると思われる。『判断力批判』において「精神」は、「多くのことを考えさせる」「構想力の表象(イメージ)」である「美的理念 ästhetische Idee」と結びつけられるのに対し、1770年代においては「(理性)理念 Idée」と結びつけられており、1770年代から同著作の出版年である1790年の間に「理念」を軸として「精神」概念の内実に変化が生じていると考えられるのである。

これまでも1770年代のカント「天才」概念における「精神」概念の重要性は既に指摘されてきたが(Tonelli 1966, 1969)、1780年代から『判断力批判』成立に至るまでの同概念の変化については分析が行われておらず、同書における役割の検討も不十分であった。本発表は、1770~80年代の「人間学講義録」やカントのレフレクシオン(手稿)の分析によって、カント「天才」概念の発展過程において「精神」概念の位置づけがどのように変化したのか、またその背景にどのような「天才」概念に関する思考の深化があったのかを示すことを試みる。

以上のように、「天才」において中心的な役割を占める「精神」概念が「理念」を軸として変化したことを示すことで、『判断力批判』における「天才」と「理性理念」の関係性、また「理性理念」に対する「美的理念」の体系的な位置づけを明らかにすることができる。また「趣味判断」概念との関係性において、「天才」の心を「生き生きさせる」原理としての「精神」が同書において果たす役割が示される。